

体外受精実施者へのインフォームドコンセント用資料の比較

医療法人社団徐クリニック ART センター

越智雪乃 清須知栄子 伊藤真理 峰千尋 中塚愛 徐東舜

【目的】以前我々は、体外受精初回実施者のインフォームドコンセント用資料として2010~13年の採卵で得られた胚全てを使用しての出生率(完全周期)を治療成績の評価とし、採卵回数ごとの累積を調べ、グラフを作成し報告した。今回我々は2014~16年の同様の資料を作成したので、2010~13年と比較検討した。

【対象】2014~16年の体外受精初回実施者のうちタイミング及びIUIにて出生した症例を除く464症例を対象とした。平均年齢は 35.7 ± 4.2 歳、平均不妊期間は 28 ± 38 ヶ月であった。

【方法】対象の採卵で得られた移植胚全てを用いて出生の有無を調べ、その採卵ごとの出生率及び累積出生率について採卵4回目までを検討した。また、ドロップアウト(治療中断)した症例を全て出生に至らなかったとみなした非楽観的予測、ドロップアウトした症例がその回数ごとの出生率と同程度で出生に至ったとみなした楽観的予測の2つを用い、2010~13年での報告と比較検討した。

【結果】2014~16年 vs 2010~13年で比較したところ、初回採卵時の年齢は 35.7 ± 4.2 歳 vs 35.8 ± 4.4 歳であり有意差は認めなかったが、初回採卵時の採卵数は 10.3 ± 6.9 個 vs 7.7 ± 5.9 個であり2014~16年の方が有意に高かった。ドロップアウト率は20.5% vs 19.6%、採卵4回の累積出生率では楽観的69.0% vs 63.3%、非楽観的64.4% vs 59.8%となりそれぞれ同じ傾向であった。累積出生率は有意ではないが全体的に2014~16年の方が高い傾向になった。楽観的予測と非楽観的予測の関係も2014~16年は2010~13年と同様に大きな差異は認めなかった。

【結語】2014~16年の方が若干の成績向上を認める。その要因としては、2014~16年の採卵数の増加が考えられる。また、楽観的・非楽観的予測ともに大きく出生率の差を認めないことから、計算が簡易な非楽観的での資料作成で充分と考える。